第５４号

長崎県公立小中学校事務職員研究会

会報　長事研

対馬市立東部中学校内
発行責任者　上 戸 健
2013（平成25年）年1月18日発行

第１３回長事研セミナー開催される！

今年で１３回目を迎える長事研セミナーが、１１月１６日（金）長崎市の長崎原爆資料館ホールで開催されました。参加者は、１３０余名とけっして多くはなかったものの、大変有意義なセミナーとなりました。開会式には、長崎市教育委員会を代表して　学校教育課長　松本健吾様に出席していただきました。長崎市教育委員会様からは、学校事務職員及び長事研に対して励ましのお言葉もいただきました。

今回のセミナーは、ジブラルタ生命の長崎エリアマネージャーとして活躍されている吉村進氏をお迎えし「保険と税金」と題して講演をしていただきました。氏は、ファイナンシャルプランナーの資格も有しておられ、その経験と知識の上に立って、生命保険と税金の関わりについて、ユーモアを交えながら大変わかりやく説明をしていただきました。生命保険は身近でありながら詳しい内容については、しっかりと理解していないことも多く、今回の講演の中でそのことに、改めて気づくことができました。また、保険の種類の中でも、課税されるものやそうでないものの違いやそれらに関して注意をしなければならない点など、学校事務を行っていくためにも必要な知識もあり、大変有意義な講演でした。

今回のセミナーでは、県下で初めての試みとして、県下各地の事務研究会の代表を務めておられる５名の方々に登壇していただき、「長崎県の学校事務の未来像」と題してディスカッションを行っていただきました。まずディスカッションに先立って、長事研会長から基調提案が行われました。それに引き続き、大村市の平山さんの司会で熱心にディスカッションが行われました。

今回の会報では、そのディスカッションの様子を中心にお知らせいたします。

テーマ：「長崎県の学校事務の未来像」

参加者：

長崎市小学校事務研究部事務局　愛宕小　片山亮一　様
佐世保市中学校教育研究会事務研究部部長
中里中　山口敏幸　様
五島市学校事務担当者会会長　福江中　森本修一郎　様
西海市教育研究会学校事務部部長
大島東小　坂口正彦　様
大村市事務担当者会副会長　三城小　平山敏行　様

まず、ディスカッションを始めるにあたって、各研究会の組織、活動状況、課題について、それぞれの研究団体から発言がありました。

（筆者）組織については、教育研究会の組織の下に位置づけてあるところ、地教委の委託を受けた校長会の研究組織の下部組織に位置付けてあるところ、また、教育委員会が招集する事務担当者会であるものなど多様な形態の組織であり、その中で活動している現状があらためて分かりました。

各地区の課題について発言をまとめてみました。

各研究会が抱える課題

・職指定もなく学校にとって不都合な点もある。権限があると責任が生じるが、対外的には単に事務に従事しているとしか見られることになるのではないだろうか。

・７割以上が50歳代という状況である。なかなか若返りすることができない。事なかれ主義に流されそうになるが、やはり研究会の充実に向けて頑張る必要がある。小学校と中学校とは研究組織が異なりそのような状況のなかで、共同実施は小中学校で組織しているため、事務職員の外勤が多くなり、校長会の一部からは批判が上がっている。そして、また事務職員自身も多忙感を感じているようだ。

・研究会活動は「ミスなく、楽しく仕事ができる職場」を目指して行っている。研究会の全体会の後に共同実施グループに分かれて話し合いを行っている。研究会の開催回数が少なく時間的余裕がない。離島ならではの県費事務が多くあるが、小規模校が多く情報量が少なく事例研究などの研修ができにくく、特殊な事例となってしまう場合がある。学校同士が離れているために、未配置校新採臨時職員の支援を行っているが、うまくいっているとはいえない。

・地元出身者が非常に少なく、地域のリーダーが育ちにくい。安定しないメンバー構成と、学校の統廃合にともなう事務職員の数の減少が、共同実施室の構成も含め今後、研究会の継続した活動にも影響を与えそうです。

（筆者）長崎市・佐世保市においては、高齢化が進んでおり、学校事務の継承をどのように進めていくかが大きな課題である。また、日頃の多忙さにかまけて、新しい取組がなかなか出来ていないようです。

市教委との関係について
・市教委と情報交換を行うことが制度化されている。その中で作成されているマニュアルは監査の基準にもなっているものであり、両者の関係は大変有効に機能している。財務事務をとおしての教育環境の整備に関わることは、学校教育の一翼を担うという意味において事務職員には最も重要なことと考えている。また、そのような重要なことに、市教委総務課と連携していくことは大変意義深いことである。現在意思疎通が大変スムーズに行われている。しかし、このことは事務職員諸先輩が築いてこられたものであり、今後も継続していかなければならない。
・研究会の中に学校事務推進委員会いという組織を作り、市教委と予算協議を行っているが、最近形骸化していると感じている。市内全体を見たときには、事務職員の不満もあるようだ。
・市教委と予算協議会を設けている。研究会としては大きな活動の一つでもあり、日頃より頻繁に連絡は行っている。
・市費マニュアルの作成や共同印刷に関する事や備品管理のデータ化等を研究会で行っているが、市教委からの働きかけはなく、事務職員だけの活動となっている。

（筆者）市教委との連携は非常に大切であることは間違いなく、今後とも連携を深めていく努力を怠ってはいけないようです。市教委から事務職員の方へ歩み寄ることは少なく、やはり事務職員方から歩み寄って密接な関係を築いていく必要があるようです。

研究会の存在意義について
・情報の収集が研究会の大きな役割である。その情報をまとめ資料を作ることも研究会にとって大切である。そうすることが、事務職員が抱えている多忙感の軽減になるのではないだろうか。また、集まることによって、意思疎通がうまくいき事務職員の地域間連携が取れるのではないだろうか。

司会者から会場の参加者に向けて、3つの質問が問いかけられました。

・仕事に対してやりがいを感じている　約5割
・多忙感を感じている　約6割
・教職員の協働体制は構築されている　約1割

研究会で、事務職員の意識調査について研究をした結果が紹介されました。
・勤務校について　・自分自身について　・毎日の業務について　・学校事務に対する意識等について　・共同実施について　・個人が抱える悩みについての6項目について８０にのぼる問に対する回答について調査研究をおこなった概要が紹介されました。

やりがいを感じている　５３％
辞めたい思ったことがあります　６５％
学校事務職員になって良かった
20代～40代は７０％　50代は　３０％
学校で孤独感を感じたことがある　８５％

会場で問いかけた質問に対する回答と非常ににかよった結果でした。

研究の結論として
事務職員は、学校現場では社会的に評価が得られにくい職である。行政職として教育職とは違った視点で学校をみるという利点を生かされず、却ってそれを異端視されることが孤独感に繋がっているのだろう。年齢とともに責任ある仕事を任せられるわけでもない。社会的評価をあげるためには学校における事務職員の存在をアピールすることが必要であり、そのことが給与面などの待遇改善にも繋がるのではないか、と考えます。そうすれば事務職員の社会的評価もあがるのではないだろうか。

（司会）今までの発言の中で、多忙感という言葉が多く出てきましたが、多忙感とやりがいはイコールに近いのではないかと考えています。多忙感で止まってしまって、その先のやりがいに繋がっていないのではないでしょうか。如何でしょうか。

・研究会で、事務職員制度について研究を進めているが、最近の学校教育の変革に伴って、学校事務も学校経営への参画を目指す必要があるという考えです。しかし、日頃の事務処理に追われているという多忙感に包まれている。そのような中でどのようにしてやりがいを見出していくか、実践例の調査を行ったが、その実践の中にこそやりがいについての重要な部分が詰まっているのではないでしょうか。

事例：教材一覧表を作り職員に配布した。大変感謝された。
改修の調査を行い、校長に情報提供を行った。
「こんな仕事をした」という問いに
・図書の予算を確保し、図書室に行きたくなるような学校にし、本好きの子どもが多くなるようにしたい。
・公共物は大切にしなければならない事を、教師をとおしてではあるが発信していきたい。私がこの学校に勤務している間にこの学校をこんな学校に変えてみよう。学校にいるからこそ学校事務の面白さを感じることができる。
・自分の仕事を限定しないことにしている。

教育条件整備を念頭に置いていろいろな要望や問題に直面した時に、予算が無いからといってあきらめるので

はなく、どのようにしたらその要望にこたえる事ができるのかというような姿勢で学校事務を進めていくという一人ひとりの事務職員の姿勢が、学校を変えていくこともできると考えると、学校事務という仕事もやりがいのあるものではないか思います。そのように考えれば、学校事務職員は財務事務をとおして教育条件整備に努めていくことが望ましい方向ではないかと考えています。

（司会）やりがいは、労力を費やしてもその成果を自分で見てそして感じることができれば、多忙であったとしてもやりがいに変わっていくのではないか。

今後に向けて

・外部から学校事務に対して、変化が求められているようだ。今後どのように学校事務が変化するのか想像もできない。外から変えられるのではなく、自分たちから変わっていこうとすることが今後に繋がるのではないだろうか。
・属人的にならず共同実施という組織を利用して、外部に発信していく必要があるのではないか。
・職に対する自信を持って、日頃より業務の改善点はないか、学校のために何ができるのかというような視点で、常に仕事に対していく事が重要でないか。

今の業務をどう変えたらいいのか

・共同実施が目的ではなく、共同実施を利用して学校でどうような仕事していくかが大事で、そのことが学校での存在感を高めていくことになるのではないだろうか。

・今後は、教育支援をどのようにおこなっていくかを考える必要がある。しかし、まずは適正に事務処理を進めていくことは当然にある。そして、その効率化のためにＯＡ化を推進し、効率化できた時間を教育支援に充てていくということが基本ではないか。

（司会）今後もこのよう議論を続けていく必要があると思います。一堂に会して議論することで理解し合うことができるのではないでしょうか。県下の事務職員の声を集めながら、学校事務の未来像を作り上げ、そして、それを共有することができるようになることを期待して討論会を終わりたいと思います。

（筆者）まず、このように県下の研究会の代表者が意見交換をおこなったことは、初めてだったと思います。そのような意味で大変有意義であったのではないでしょうか。

今回の討論会で「多忙感」と「やりがい」という２つのキーワードが浮かび上がってきたようです。共同実施の本格的導入、度重なる制度の改定、財務事務のさらなる厳格化等事務職員を取り巻く状況は変化しており、それに伴って、「多忙感」が県下隈無く事務職員を覆っているのは確かなようです。しかし、そこから脱しようする研究や試みも行われています。「多忙感」を超えた先に「やりがい」があるのかもしれません。「やりがい」をどのようにして、どこに見出していくのかが、学校事務の未来に繋がっていくような気がします。

最後に今回のディスカッションに参加してくださった５名の方々に心より感謝申し上げます。

《参加者の感想》

講演とディスカッションが行われましたが、そのどちらも内容の濃いものでした。

講演は、ジブラルタ生命の方の「生命保険と税」と題してのお話でしたが、私は今まで、生命保険は何かあったときの保障、としか考えていなかったので“目からウロコ”の内容でした。生命保険の掛け方によって税金のかかり方も変わり、得をしたり、損をしたりする。さらにこういう活用の仕方もあるのか、と内容は難しいものでしたが、すごく勉強になりました。

ディスカッションでは、『長崎県の学校事務の未来像』というテーマで、県内各地域の代表の先生方が議論をしてくださいましたが、その中で長崎県に限らず、全国的に50 代の事務職員が多いという統計を見て驚きました。自分の周りを見てみても、50 代の先生方が多いとは感じていましたが、約４割もの割合とは思っていませんでした。

壇上に上がられた先生方のお話を聞いていて、今後、学校事務がどうなっていくのか、世代交代の時期が来たときにはどうなるのか、とすごく憂えていらっしゃるのが伺えました。ベテランの先生方がいなくなっていく中で、私たち若い世代がどう頑張っていかなければいけないか、学校の中で事務職員が本当に必要とされるようにどう位置づけしていくか、もっと考えていかなければいけないと思いました。　（２０代女性）

≪今後の日程≫

２月１５日　長事研第２回理事会評議員会（長崎市）
２月２１日　全事研理事会（東京都）
２月２２日　全事研セミナー（東京都）

◇　◇　◇　◇　◇　◇　◇　◇　◇　◇　◇　◇　◇

＜会報連絡先＞長与町立長与小学校　宮崎賢一

TEL・ FAX 095-883-3167